

# 東洋文庫草創期の協力者 松村太郎について

稲 森 雅 子

東洋文庫の草創期、国内外で活発な資料蒐集活動が行われた。地方志や族譜といった漢籍もこの頃集められたもので、東洋文庫を代表する資料群の一つとなっている。周知のとおり、これらの蒐集の指揮を執ったのは、和田清（1890～1963。敬称略、以下同）である。和田は、1920年代半ばに北京へ赴いて漢籍を蒐集した。このとき、北京で和田と知り合い、書籍蒐集に協力した日本人がいた。松村太郎である。松村太郎とは、いかなる人物であったのだろうか。本稿は、これまで謎の多かった松村太郎について、関連資料により実像に迫ることを試みる<sup>(1)</sup>。

## 1. 東洋文庫と松村太郎

和田清が北京に滞在したのは、1926年2月～1927年6月である<sup>(2)</sup>。和田は、回想録「学究生活の想出」に次のように記す。

支那の地方志は約六千種もあつて、之を集めることは容易でないから、私はただこれも蒐集の緒口だけつけて来た。今日東洋文庫の地誌は二千種に近く、家譜家乗も八百種に餘り、海内第一の大蒐集である。蒐集の緒口とは北京の珍史料の蒐集家松村太郎氏に逢つて、之に後事を托して来たことである。松村氏は大分縣の人で<sup>(3)</sup>、初めは確か某新聞の通信員として北京に來られたが、後には坂西公館<sup>(4)</sup>の諜報機關として活躍して居られたやうである。支那近世史に非常な興味を抱き……私は同氏に逢つて肝膽相照らし、「歸國の後は東京から注文するから、何でも送つて呉れ」といふやうに確約して歸つた<sup>(5)</sup>。

松村は、和田と出逢い、東洋文庫の資料蒐集に関わるようになったとみられる。また、松村が大分県出身で、珍史料を蒐集していたこと、報道関係者として北京に赴任し、諜報活動をしていたことが確認できる。

従来知られている松村太郎に関する言及は、ほとんど東洋文庫に関するものに限定される。主要なものを以下に示す（(1)～(3)の括弧内の注記は筆者）。

(1) 當文庫曩に考ふところあつて、大正九 (=1920) 年以來、銳意これが蒐獲を企て、いま架に收むるところ實に二千五百五十部、五萬四千二百七十九卷を算す……こゝに収録せる方志中、その採購に當つて在北平（当時の北京の名称）**松村太郎氏**の盡力を煩したるもの頗る多し。記して以て深甚なる感謝の意を表す。

（岩井大慧『東洋文庫地方志目録』、東洋文庫、1935年、「序」2頁）

(2) 昭和五 (=1930) 年五月七日付書翰を以て、當文庫は前の北京順天時報社社長渡邊哲信氏の名義で、順天時報……及び華北正報……の寄贈を受けた。それは昭和五年三月末日を以て或る事情の爲、同社が閉鎖の已むなきに至つたのを機とし、一揃ひを我が外務省に保存し、他の一揃ひを民間の堅實な學術團體にして、而も保存に萬全を期し得るところとの社及び外務省側の興望にかなつて、當文庫に寄贈されたのである。尤もこの間には前同社員**松村太郎氏**の一並ならぬ盡力の結果であることは特筆しておかねばならぬ。

（岩井大慧『東洋文庫十五年史』、東洋文庫、1939年、14～15頁）

(3) 東洋文庫において満洲本を特に意欲的に蒐集した時期は、大正末から昭和十年代、すなわち一九二〇年代から三〇年代にかけてのようである。初めその衝に当たったのは当時文庫の研究員であった和田清氏で、北京在住の**松村太郎氏**も以後現地において何かと尽力されたらしい<sup>(6)</sup>。

(神田信夫「東洋文庫所蔵満洲文書の二三について」、  
『東洋文庫書報』第10号、1978年、2頁)

- (4) **松村太郎氏**は上述の在北京順天時報社の社員であったが、東洋文庫が設立当初に各種の漢籍の叢書、地方誌、族譜、明実録等を収集するに当たって、格別の尽力にあずかった。氏は、昭和15年(1940)に帰郷し、同18年(1943)にその蔵書であった近代中国関係書冊・雑誌(中文・日文)数千冊を寄贈したが、惜しくも翌年逝去された。  
(斯波義信「財団法人東洋文庫の80年」、『東洋文庫八十年史I——沿革と名品——』、東洋文庫、2007年、24頁)

松村は、東洋文庫に対し、地方誌、満洲語資料、族譜、明実録の蒐集ほか、北京の日系新聞寄贈に尽力するなど、さまざまな形で協力し、自身の蔵書も寄贈している。さらに、松村は、元順天時報社社員であり、1940年に帰国して1944年に故郷で亡くなったことが確認できる。

松村は、いつ頃から北京に滞在し、北京でどのような活動をしたのだろうか。以下、時間軸に沿って検討したい。

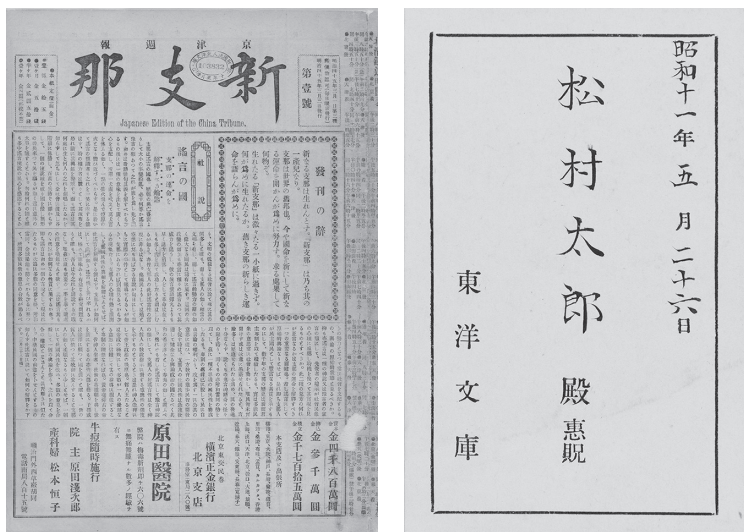
## 2. 1910～20年代前半の記録

二十世紀初頭の義和団事件終結以降、日本人が北京を記録した文献も少しずつ増え始める。管見の限り、最初に「松村」なる人物が登場する資料は、宇野哲人『支那文明記』(大同館書店、1912年)である。明治「三十九(=1906)年五月十三日、宮内學士、**松村**、中村、川村の四君と約して十三陵に向ふ」<sup>(7)</sup>とある。

1921年刊の丸山昏迷『北京』に「松村太郎」の動向が2ヶ所に記されている。

1ヶ所目は、最も早い時期、中華民国成立直後の動向である。「北京の邦人 新聞及び雑誌」の項、雑誌『新支那』欄に「明治四十五(=1912)年三月伊集院公使 水野參事官 松本君平氏等の援助の下に、鷲澤與四二 安藤万吉 井上一葉 **松村太郎氏**等が週刊新支那を發行したのに始

【図1】



左：『新支那』創刊号1頁

右：東洋文庫『新支那』寄贈識語（ともに東洋文庫所蔵）

る」<sup>(8)</sup>とある。すなわち、松村は、1912年頃には報道関係者として北京で活動していたのである。東洋文庫所蔵の『新支那』の2年分（1912～13年）は、松村が1936年に寄贈したものである（【図1】参照）<sup>(9)</sup>。

2ヶ所目、『北京』出版時のもので、「各新聞社通信部」の項に「國民新聞主任」と記され、住所は「東單牌樓棲鳳樓」とある<sup>(10)</sup>。周知のとおり、『國民新聞』は、徳富蘇峰（本名猪一郎、1863～1957。以下「蘇峰」と略称）が1890年2月に創刊した日刊新聞である。

松村と蘇峰との関係を示す最初の記録は、『支那漫遊記』（民友社、1918年）にある。これは、1917年9～12月、蘇峰が中国大陸を旅したときの記録である。蘇峰は10月14日より半月間北京に滞在した。その間、大總統馮国祥（1859～1919）、徐世昌（1855～1939）など政界の要人、北京滞在中の大谷光瑞（1876～1948）らと面会し、万里の長城や琉璃廠などを巡った。松村の名は、北京出立の直後にある。蘇峰は「特に謝す可き

は、北京滞在中、始終一貫、予等の爲めに面倒を見られたる**松村太郎君** 脇川文近君也」<sup>(11)</sup>と謝意を表す。蘇峰の北京滞在中、松村はその世話係をつとめたことが確認できる。これ以降、「国民新聞の松村太郎」としての記述が見え始める。

1918年9月4日、徐世昌が大総統に当選した。蘇峰は、徐世昌の慶事を知るや、さっそく祝電を送った。このとき、松村が、蘇峰の名代として徐世昌の自宅まで祝電を届けた、との記事が『順天時報』に掲載されている<sup>(12)</sup>。

また、同年11月の外務省外交史料にも松村の行動が記録されている。北京の日本警察・波多野亀太郎警部が、日本公使館宛に、朝鮮独立運動家・李光洙(1892～1950)について偵察結果を報告した文書である(読点は筆者、括弧内は筆者注)。

右(李光洙)ハ客年(=1918年)十一月八日午前十時列車ニテ妻ト称スル許英肅……同伴來京、旅館一二三館ニ投宿、國民新聞社外報部記者玉生武四郎ノ添書ヲ以テ當地國民新聞通信員松村太郎ヲ訪ヒ松村ノ世話ニ依リ同月十一日八寶胡同十四号幕田ナル者ノ所へ同居更ニ同月二十七日大土地庙五号支那人家屋ヲ部借シテ滞在セル(以下略)

「要視察鮮人滞京中ノ行動ニ関スル件」  
(北警秘発第一号、大正八年一月三十日)<sup>(13)</sup>

李光洙は、当時早稲田大学の学生で、のちに韓国「近代文学の祖」と称された人物である。松村は、国民新聞記者玉生武四郎の依頼を受けて、李光洙の仮住まいを手配している<sup>(14)</sup>。依頼者の玉生武四郎は、蘇峰の中国旅行に随行していたので<sup>(15)</sup>、松村と面識があったと思われる。さらに推測を重ねれば、これら一連の手配は、蘇峰の意向によるものであったのかもしれない。

中国側の資料にも、1918年の記録がある。同年11月に月発行された中国地学会<sup>(16)</sup>の機関誌『地学雑誌』である。新入会員として、外交官の小村俊三郎(1870～1933、北京在任期間=1910～17年)とともに、松村の名

前を記す<sup>(17)</sup>。東洋文庫は『地学雑誌』の創刊号（1910年）から1937年発行分までを蔵する<sup>(18)</sup>。

次いで、1920年『日本外交文書』に登場する。同年7月14日、北洋政府内の直隸派と安徽派との内戦が勃発した。戦いに敗れた安徽派の数名が、北京の日本公使館へ助けを求め、日本陸軍の駐屯地に収容された。このとき、松村は亡命者の姚震（1884～1935）を3回（8月11、16、17日）訪ねている。肩書きはやはり「国民新聞記者」である<sup>(19)</sup>。

『国民新聞』では、1923年に2件の署名記事が確認できる<sup>(20)</sup>。タイトルは「排日問題の私見（一）～（七）」（7月12～22日）と「曹錕大總統の統一計画虎の巻」（11月10日掲載、10月17日記）である。

前者は、排日運動<sup>(21)</sup>について取り上げた長文の連載である。松村は、中国の現状を報告した後、日本の政財界の対応を批判し、対応策を提案している。以下に最終回（7月22日）の「結論」より一部を示す（句読点は筆者）。

以上述べし所は僅に大綱に過ぎずと雖も、予の最も痛切に考へ居る所を披瀝せるものなり。就中、支那及支那人に對し、愛と誠意とを以て臨むことを以て、根本策と思惟す。日本人が此點に氣附かざる以上は、兩國及兩國人の親善の如き、到底期す可からざるなり……只だ予は、日本及日本人が先づ自ら改むるを以て急務となすのみ……飽迄隱忍自重し、極力列國の同情を引附け置き、而して最後の一鐵槌を下すを有利とせん。思慮なき言動は、却つて支那に種々の口實を與へ、列國をして猜疑心を増さすのみにて、毫も利なからん。

松村は、中国人の本質を深く理解し、「愛と誠意」をもって対応すべきだと説いた。「私見」と題するように、個人の意見が強く反映されたものと思われるが、日本人の驕った好戦的な言動に警鐘を鳴らしている点は注目に値する。

後者は、10月5日、曹錕（1862～1938）が北京政府の大總統に就任したことに関する記事である。曹錕は、大々的な議員の買収と脅迫により大總統に就任したものの、当初から抵抗勢力が多かった。本記事は、こ

のような状況を受けたものである。松村は、張作霖や孫文らに対する曹錕の方針を「昵近の某氏」に尋ね、「永年の友達甲斐に特別に要點を教へて貰つた」という。陸軍諜報機関所属の経験（あるいは当時も在籍か）を活かして取材したと思われる。

このほか、同年9月に北京から蘇峰宛に出された一書簡にも松村の名がある。これは、『国民新聞』の創刊に尽力した福田和五郎（1870～1927）が北京を訪れた際に送ったもので、「当地にては松村太郎氏など日々往來いたし居候」<sup>(22)</sup>とあり、三者が旧知の間柄であったことを窺わせる。

以上、1920年代前半までの資料を確認した。松村は、国民新聞社の通信員として活動していた。また、諜報機関と関係があった様子も推測される。

1929年1月、蘇峰は、社内の確執により国民新聞社を去り<sup>(23)</sup>、3月下旬に大阪毎日新聞社の社賓となる。また、先述のとおり、『順天時報』も1930年3月に廃刊となった。

この前後から、松村の活動にも変化が見え始める。

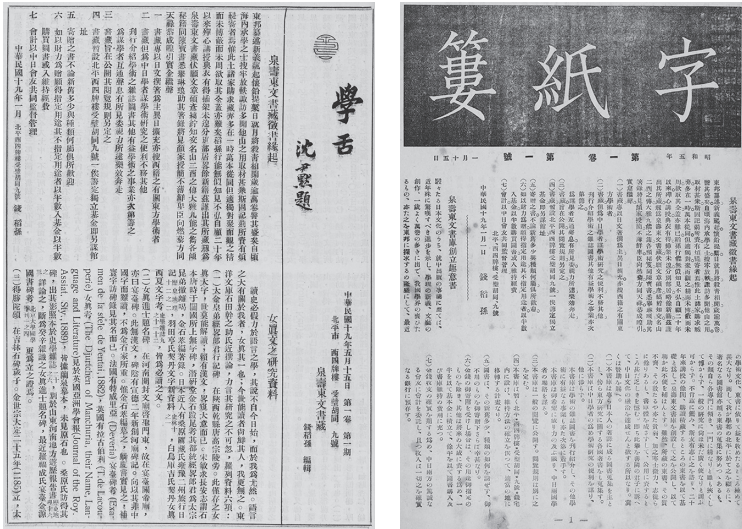
### 3. 銭稻孫の日本語図書室「泉寿東文書庫」への参画

『東洋文庫十五年史』の第六章「第三節 受贈図書並に芳名（イ）和漢書」により、松村個人の寄贈記録を確認すると、38ヶ所に記録がある<sup>(24)</sup>。初回は、1928年9月24日であるが、大半は1935年以降の寄贈で、中国で刊行された学術雑誌が多い。

ここで『字紙篋』<sup>(25)</sup>に着目してみたい。『字紙篋』は、北京にあった日本語書籍専門の図書室「泉寿東文書庫（中国名＝泉寿東文書蔵、以下日本名を用いる）」の日本語の月刊機関誌である。管見の限り、国内に存する『字紙篋』は、東洋文庫（所蔵期間＝1930～35年）と岩波書店（創刊号）のみである。東洋文庫蔵書には、中国語の機関誌『学舌』（銭稻孫主編）も合綴されている。東洋文庫に記録はないものの、これらは松村が寄贈したと思われる。

泉寿東文書庫は、1930年1月、銭稻孫（1887～1966）の自宅に開設された。銭稻孫は、浙江省の人で、外交官の父・銭恂の赴任に伴い、1900

【図2】



左：『学舌』創刊号表紙  
右：『字紙簞』創刊号表紙（ともに東洋文庫蔵）

年に家族とともに来日し、1907年まで慶應義塾幼稚舎などで学んだ。日本語が堪能で、清華大学教授として日本文学や日本史などを担当した。また、中国文学研究者の目加田誠（1904～94）を自宅に寄寓させるなど、日本人留学生を親身に世話したことも知られる。戦後は、日本に協力した売国奴（漢奸）とされた。『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、1959年）のほか、謡曲や小説など幅広い時代の日本文学の翻訳を残している(26)。

銭稻孫にとって、日本語図書館の創設は、長年の悲願であったが、なかなか支援者が現れない状況が続いた。そこで、書籍も資金も寄付を募り、場所は銭宅の一室を充てる形で、ようやく開設にこぎつけた。開設の前年、銭稻孫に対し、寄付による運営を提案したのが松村であった(27)。

松村の関与を裏付ける資料の一つとして、満鉄大連図書館の月刊誌『書香』第11号（1930年2月）の記事「泉寿東文書庫の設立——北京で日本



書籍の図書館」がある<sup>(28)</sup>。そこには「日本文學の研究で名高い北京大學講師錢稻孫氏を初め中華公寓の松村太郎氏、滿鐵公所の黃子明<sup>(29)</sup>氏等同志相寄つて」設立したとあり、松村が泉寿東文書庫開設メンバーだったことを示している。

『字紙箋』は、開設と同時の創刊で、その時々々の学界情報や隨筆、寄贈報告、取次書籍一覧などの記事がある。発行元は「北平東城西四堂子胡同・中華公内 字紙箋社」とある。「中華公寓」はさきの『書香』に記される松村の住所である。

『字紙箋』創刊号から第3号までの巻頭には、「泉寿東文書庫創立趣意書」全文が掲載されている。趣意書によれば、その主要事業は、図書の閲覧、貸出しのほか、日中の研究者の交流仲介、書籍の取次販売である。ちなみに、この趣意書は、別途印刷のうえ、各所に送付された。先年、徳富蘇峰記念館（神奈川県二宮町）に、その郵送物が残されていることを発見した。宛名の文字は、松村によるものである<sup>(30)</sup>。

また、『字紙箋』には、松村の行動を追跡できる記事がある。第1巻第2号所載の「日支文人の会合」である。会合の出席者は、志賀直哉（1883～1971）、里見弴（1888～1983）、錢稻孫、周作人（1885～1967）らで、誌面には、寄書きの写真も添えられている。

志賀直哉と里見弴は、南滿洲鉄道株式会社からの招待旅行の途中で北京に立ち寄った。旅行後、志賀直哉は「昭和四年・昭和五年滿洲旅行（日記）」<sup>(31)</sup>、里見弴は『滿支一見』<sup>(32)</sup>を記した。両名とも、松村の様子を書き留めている。一行の北京到着直後に、錢稻孫と松村が、宿泊先を訪ねている。このときの松村について、里見弴は「北京在住の日本人中でも、最も古顔に属する（はっきりした年数は忘れたが、慥か四十年前後）のM氏」と記した。一方、志賀直哉は、錢稻孫宅へ宴席に招かれた際、松村が迎えに来たこと記録している<sup>(33)</sup>。

これらの記録からは、松村が、泉寿東文書庫の運営を通して、錢稻孫を支えようと付き従う姿が浮かび上がる。

さらに、『字紙箋』の記事のうち、図書の寄贈報告について触れておきたい。報告によれば、寄贈者の多くは日本人で、學術関係者以外のいわゆる一般人も散見され、學術書以外の書籍も多く寄贈されている。これ

は、寄贈者の中に、松村と交遊のあった人々が含まれていたことを暗示しているだろう。「泉寿東文書藏第一年度会計報告」<sup>(34)</sup>によれば、開設からわずか1年間で蔵書数は、図書3,520冊、雑誌836冊にも増え、寄贈者数は延べ400余名にのぼった。当時、北京大学図書館の日本語図書は2000冊余りであったという<sup>(35)</sup>。これと比べても、泉寿東文書庫への寄贈量が多かったことがわかる。これらの状況から、図書室運営は、順調に推移していたと思われる。

しかし、1931年9月18日、満洲事変が勃発すると、様相は一変する。泉寿東文書庫は一時閉鎖となり、書籍取次事業や『字紙箋』刊行も中断を余儀なくされた。開設からわずか2年足らずの出来事であった。

翌1932年1月、『字紙箋』は「字紙箋社松村太郎」によって復刊される。復刊号（第3巻第1号）には「泉壽東文書藏関係者一同の諒解を得て、『字紙箋』を再刊して、之に書目類を掲載」し、泉寿東文書庫の全面再開まで「不肖私個人、全責任を負ふて懇切に従事」する、との宣言がある。これ以降、東洋文庫所蔵分の最終号（第6巻第4号、1935年5月1日発行）までの紙面は、取次書目一覧と為替レートなど、連絡事項のみとなる。

1930年前後から、松村の活動は、報道から書物に関わることへと移行した。特に、銭稻孫の日本語図書室開設・運営に深く関与し、機関誌の発行や書籍の販売取次ぎなどを担当した。しかし、満洲事変の勃発により、図書室は閉鎖される。これを機に、松村の行動は再び変容し、書籍の取次販売も個人事業へと軸足を移していったとみられる。

#### 4. 書籍購入取次事業者として

先述のとおり、松村は、1926年頃、和田清と知己を得たことにより、東洋文庫への納書に協力することになった。現在のところ、これが松村にとって書籍の購入を取次いだ最も早い事績であるだろう<sup>(36)</sup>。

今般、松村の書籍の取次販売における具体的な様子を示す書簡数点が、関西大学図書館内藤文庫で見つかった<sup>(37)</sup>。京都帝国大学東洋史学講座の教授をつとめた内藤湖南（1866～1934）が顧客の一人だったのである。

内藤湖南は、泉寿東文書庫に対し、複数回にわたり図書を寄贈している。従って、寄贈をきっかけに書籍を注文し始めたものと推測される。

一例として1931年2月10日の書簡をみてみよう<sup>(38)</sup>(関西大学図書館「湖南宛書簡」一覧の整理番号=3062、封筒表左下に「泉寿東文書蔵」と印字。筆者翻字)。

内藤湖南先生大鑑 二月十日

謹啓。貴台には益々ご健祥に浴せられ大慶に存じます。お御手紙並に国際郵便を替何れも拝誦。

張文襄公全集二十秩百二十冊は、合計十四包に包装の上、昨日第四種郵便にて御届けしましたから、御査収下されたい。一々落丁の有無を精査させましたけれ共、万一、落丁のもの、御発見の場合は、その本文け御返送下されたい。早速取換へて御届け申ます。

尚ほ発送の都合上、帙と本と、別々になりましたが、夫れ夫れ付箋をつけて上げましたから、御面倒でも、右附箋によって、帙に入れて頂きたうございます。甚だ勝手釜しい御願ですけれ共。

中国地名大辞典代金として御送付下さいました金八円は、その後、日本金相場更に騰貴の爲め、昨日当地郵便局より銀拾八元〇八分(金一元は銀二元二角六分換)を領収しましたので、差引銀三元〇八分超過となりました。御超過金は張文襄公全集代金の内入と致しましたから左様御了承を願ひます。

張文襄公全集代金、銀一百拾元(送料共)の処、上述銀三元〇八分を差引き、銀壹百〇六元九角二分は、御序手の節、御送付下されば結構であります。金銀相場は、毎日変動しますけれ共、昨今の状況よりすれば、金五拾円を御送付して下されば大帝過不足なしにすすむかと存じます。

数理精蘊等は、紙箱の破損を防ぐ爲め、入れてあげましたもので、屠本ですから、ワザワザ御返送下さらないで結構なのであります。

尚ほ今後とも、御入用の図書有ります時は、多少に拘はらず御注文を願ひます。できる丈け御便宜を計ります。終りに敝書蔵最近の模様を御知らせ申します。貴台始め各方面の御同情によりその後逐

漸寄贈書増加し、権威ある図書も相当所蔵するに至りましたので、借閱者引きも切らず、桑原博士還暦記念史学地理学論叢等の如きは、登記の終るを待つて、早速借閱さる盛況で、私共としては、書蔵創立の無意義ならざりしを知ると共に、日本各方面の厚き御同情を、益々感謝してゐます次第であります。近く、創立後一ヶ年の事業報告を作製して、お目にかけることにしてゐます。右の次第でありますので、今後も何卒御支援と御指導を賜り、御序手の節 御知合の方々にも、御吹聴下さるやう、切にお願い申します。

先は御礼旁御通知まで

敬具

手紙は、代金及び支払方法について仔細に述べており、慎重かつ丁寧な姿勢が見える。一方、「紙箱の破損を防ぐ為め、入れてあげましたので、屠本ですから、ワザワザ御返送下さらないで結構」とも述べる。売り物にならないと見なした書籍を商品保護の素材にしてしまうなど、書籍の取扱いにおいて、ややいい加減な面があったようである。また、泉寿東文書庫の運営状況を報告し、一層の支援を懇願している。ここから、松村が泉寿東文書庫の事業に熱情を注いでいたことが見て取れる。

内藤湖南は、満洲事変後も松村個人から書籍を購入し続けた。最後の書簡は、1933年9月であり、亡くなる直前まで取引があったことが確認できる<sup>(39)</sup>。

このほか、長澤規矩也（1902～80）も、松村について言及している。長澤規矩也は、1927年より6年間、毎夏書籍を購入するために北京を訪れた。そのため、北京の書店事情に精通していた。松村への言及は、1934年の『書誌学』第2巻第5号「質疑応答」コーナーにある<sup>(40)</sup>。中国の書籍雑誌を直接購入する方法や書店についての問合せに対する回答である。新刊書の購入先として、日本国内（文求堂と彙文堂）を紹介したあと、次のように記す。

別に民國所在のもので、

北平東城西堂子胡同、中華公寓内、字紙簍社

を利用されるのもよいでせう。經營者松村太郎氏は嘗つて順天時報

の記者だかやつてゐられた方で、在留年月も永く、北平書賣とも知合が多いので、何かにつけて便利です。營業開始以前でも、よく北平の小肆や露店の店頭で氏の姿を見ました。古雑誌やパンフレット式のもの、購入には、氏が營業されて便利になりました。民國で、雑誌のバックナンバーを求めることは非常に難しいことなのです……以上は新刊書についてありますが、漢籍の古本は上記三肆の中で文求堂が第一です。字紙簞社は古板のものも扱ひますが、松村氏の専門外です。それでも、信用ある古書肆と連絡がありますから、悪いこともありません。

記事では、中国所在の書店として、唯一住所も含めて紹介される。新刊書の取次商として信頼されていた様子が窺える。北京の書店に知り合いが多く、雑誌のバックナンバーをみつけることもできるが、古書籍は門外漢であるなど、情報通の長澤規矩也らしい記述である。また、かつて「順天時報の記者」だったようだと述べる。

満洲事変以降、松村は、書籍の取次を主な仕事としたとみられる。顧客に内藤湖南を抱え、長澤規矩也から雑誌で紹介されるなど、北京在住の書籍取次商として、一定の評価を得ていた様子が窺える。

やがて、松村は、再び新たな方向へと動き始める。やや長文になるが、先の和田清「学究生活の想出」の続きを以下に示す。

松村氏と協力したことには、も少し他に手前味噌がある。それは四十餘冊の國學文庫を出したことと、他に十餘種の東洋學の重要洋書を出刊したことである。これは実は松村氏が北京の新興書肆文殿閣と合同して行はれた仕事であるが、その初め同氏はそれらの書目選定を依頼して來られた。そこで私が想ひついたものを書出した結果がこれらの叢刊になつたのである。例へばあのハワースの「蒙古史」<sup>(41)</sup>の第一巻は今の愛媛大學教授藤野彪氏の秘藏本を借りたのであるし、グルーベの「女眞言語文字考」<sup>(42)</sup>は私の藏本を覆印し、ルブルクの「紀行」<sup>(43)</sup>は白鳥博士の御本を底本としたのである。國學文庫についても、「蒙古源流」は私が四庫全書中の文津閣本を指定

し、明の簾大亨の「北虜風俗附北虜世系」は特に選んで北京の大藏書家傅增湘氏の秘本を借鈔したものであり、「萬歴武功録」は私が天津圖書館で發見し、東洋文庫のために寫したものを松村氏が利用した如きがその例である。尤もこれはいづれも世界出版法の不備に乗じて敢行した剽窃版に近いものであるが、それでも今日皆稀少本になつて相當尊重せられてゐるのを見ると、多少の効果を誇らざるを得ない。ただ私は當時、「學者は貧乏であるから、本の値段は安いほどよい」といつて、概して小型の特殊本だけを選んだのに反して、松村氏が勝手に出した一般的なコルヂエーの「支那書誌」<sup>(44)</sup>などの方が賣行がよかつたので、松村氏は「安くしても賣れないものはやはり賣れない、學者の選定など一向當てにならない」といつて、私の信用が無くなつたことは事實である。

文殿閣は、王殿馨が1934年、北京の隆福寺街に開業した書店である。隆福寺街は、琉璃廠に次ぐ規模の古書街であつた。

和田清の回想を裏付ける記述が、雷夢水「隆福寺書肆記」にある。松村は、文殿閣の店員と親しくなり、辺境の珍書を選定して、『国学文庫』41種49冊と『西人論中国書目』5冊を出版したといふ<sup>(45)</sup>。

国学叢書は、B6版に近い大きさの鉛印本である<sup>(46)</sup>。表紙や中表紙に叢書名や出版時期を記すのみで、いわゆる出版情報は見あたらない。目次や出版者序文なども一切ない。しかも、本文の紙が非常に薄いため、裏頁の文字が重なって見え、かなり読みづらい箇所がある。総じて、陳腐な仕様と言わざるをえない。

これらの出版は、現在の日本における著作権法等に鑑みれば、適正であるのか疑念を生じる。翻つて、戦況の悪化に伴い、原典資料を入手しがたい状況下においては、一定の需要を満たしたのであろう。

松村は、1935年末頃、個人での図書取次ぎをやめた可能性が高い。東洋文庫所蔵の『字紙箋』は1935年分までで途切れており、こののち廃刊となつたと思われる。加えて、東洋文庫への漢籍購入取次業務も1935年末で辞任している<sup>(47)</sup>。

1936年以降は、文殿閣の影印、翻刻本の出版事業に専念した可能性が

高い。和田清が回想録に記した書物や国学叢書の出版時期は、1933～40年であるが、1936年前後に集中している。そして、これら覆印本の出版は、1940年以降途絶える。これも、松村の帰国時期と符合している。

松村は1920年代後半より、書籍取次事業に携わった。それは、東洋文庫に協力する形で始まった。泉寿東文書庫開設中は事業の一環として、満洲事変以降は個人営業の字紙簞社として活動した。1933年頃から書籍の出版に関与し始め、1935年末には東洋文庫への協力も辞退するなど、書籍取次ぎを廃業したようである。1936年以降、1940年に帰国するまでは、文殿閣の出版事業に専念したものと思われる。

## 5. 同時代人から見た松村太郎像

ところで、松村は、周囲からどのような人物とみられていたのだろうか。日本人留学生及び中国人の記録を拾ってみよう。

和田清は前掲「学究生活の想出」で次のように述べた。

「東洋文庫は公共の図書館であるから、成るべく善い本がよいが、私の分は本は悪くても安いほどよい」と頼んだら、正直な**松村氏**は續々送つて呉れる本の中、私の分は特にボロボロのものを格安に送つて呉れるには、少々辟易したこともある<sup>(48)</sup>。

この逸話から、松村は指示通り、愚直に履行する性格であった様子が見て取れる。

次に、1930年初春の記録を紹介する。鴻山俊雄「青春回想——北京遊学・青島滞在の頃」である。鴻山俊雄（1907～91）は、このとき数ヶ月間北京に留学して、松村夫妻と知り合った<sup>(49)</sup>。

小野崎文磨警察署長ご一家の出迎えを受け、領事館官舎に落ち着いた。一晚お世話になり、翌日予め連絡されている下宿先の中華公寓へ案内されたのである。場所は、ここ北京の各国公使館区域である公民巷から程近い王府井大街の北端から北へ二筋目の西堂子胡同

にあった。ここで北京在留三十年の国民新聞駐在記者松村太郎氏夫妻に紹介され、滞在中は何かと面倒を見てくださることとなった……子供のない五十歳前後の松村夫人には何くれとお世話になった。松村氏を通じて満鉄囑託の黄子明氏や、清華大学教授で万葉集の権威者銭稲孫氏に紹介され、ご指導を受けるだけでなく、お世話になった。北京到着後は、学生服を中国服に着替えるについても、松村夫人が仕立屋に連れて行き、生地を選択、寸法はかりに至るまで気を使い、新調してもらった。また松村夫人に案内され、元顧維鈞内閣の内政総長で北京政府の教育部総長であった医学博士湯爾和氏のお宅を訪問して、日本人の湯秋実夫人と歓談ひとときを楽しく過した。当時湯氏は相にく出張されてご不在であった。またいつの間にか松村、黄両氏が相談されたのであろう、両氏と夫人達四人が誘ってくださって、中南海公園に遊び、中国料理をご馳走になった、帰りに写真を撮ったのが、現在も当時の思い出として残されている。

松村は「北京在留三十年」の国民新聞駐在記者で、夫妻には子どもはいなかったという。また、夫婦揃って世話好きであった様子や、松村の人脈（日本警察署長、黄子明、銭稲孫、湯爾和）が窺える。鴻山俊雄の留学時期から逆算すると、松村が北京に来たのは、1900年頃ということになる。

このほか、満洲事変後に留学した目加田誠の留学記録『北平日記』<sup>(50)</sup>にも、松村の名が記されている。目加田誠は、1933年10月～35年3月、文部省からの派遣で北京へ留学し、全期間の日記を残した。先述のとおり、最後の数ヶ月間、銭稲孫宅に寄寓した。松村に言及する部分を以下に示す<sup>(51)</sup>。

- 1933年11月10日 十一時過ぎて、中華公寓に松村氏及桂君を訪ふ。  
11月12日 午後、西四牌楼北、受壁胡同の銭稲孫氏を訪問。  
……松村太郎氏来合せたり。  
1934年7月8日 銭稲孫氏を訪問。徐鴻宝氏、松村氏も来り合せり。  
11月5日 夜、桂君来る。我が銭宅へ引越しの事を他処にて



きき甚だ不平の面持。松村太郎の話を持ち来りて誠  
に人を不愉快たらしむ。松村を訪問、妻君に逢ふ。  
実にうるさき世界也。

1935年1月2日 ひる、銭氏宅にて松村氏等と共に会食。

1934年11月、目加田誠は大家の都合により、急遽新たな下宿先を探すことになり、銭稲孫がこれを引き受けた。これに関連して、松村が目加田誠を不愉快にさせた。ただし、目加田誠は筆を控え、詳細を記していない。また、泉寿東文書庫が閉鎖された後も、松村は銭稲孫と交流を続け、しばしば銭稲孫宅を訪れていたことが確認できる。

次いで、1937年10月より二年間北京に留学した竹内好（1910～77）の留学日記「北京日記（一九三八年）」に登場する<sup>(52)</sup>。「一昨夜は夜おそく……隆福寺のつばめと云うのに行ったら、松村太郎、森鹿三、今西春秋、服部、数納〔兵治〕と云う連中が居た。……今西春秋と云う男にはじめてあった<sup>(53)</sup>。なるほどいい男であった。松村太郎はいやな老人であった」（1938年12月16日）と、松村に不快感を抱いている。また、竹内好は「老人」と表現しており、老境に達していた様子が窺える。

他方、中国人の回想談にも松村の逸話が残っている。葉祖孚「古老的文化街——『琉璃廠小志』読後」<sup>(54)</sup>である。葉祖孚（1928～98）は、中華人民共和国成立以前の北京について、街並みや風習などを多く記録して残した。

1930年頃、日本人の松村太郎が松筠閣古書店に本を買いに来て、徒弟と口論になった。彼は激高して、書店にその徒弟を辞めさせるよう要求し、本を買いに来ないぞと脅迫した。松筠閣の主人は劉際唐で、期刊雑誌収集する専門店であった。彼は、商売にならなくても徒弟を守らねばならない、との大義から日本人の不当な要求をきっぱりと断った。これは一時期美談として広まっていた<sup>(55)</sup>。

反日感情が高まる中、この事件は、北京の人々にとって、痛快な出来事であったのだろう。松村は、期せずして、嫌悪すべき日本人の象徴的

存在として語り継がれることになったのである。松筠閣は、古書店街琉璃廠にあった古書店で、「雑誌大王」と呼ばれていた<sup>(56)</sup>。先掲のとおり長澤規矩也は、松村は雑誌のバックナンバーを手配できる、と述べている。松村は、松筠閣にその手配を依頼していたとも推測される。

この件について、松筠閣の元店員・魏広洲（1912～2006）も同様の証言残している。松村は、松筠閣店主と数年来の付き合いがあったが、事件後絶交し、その後に文殿閣を頼ったという<sup>(57)</sup>。この出来事は、松村が事業を書籍取次ぎから出版へと転換した理由の一つであろう。

なお、魏広洲は、松村を順天時報の編輯者とも述べており、『東洋文庫十五年史』や長澤規矩也の記述と合致する。これらの回想談を総合すると、松村は、国民新聞、順天時報の二誌ともに在籍していた、と推測される<sup>(58)</sup>。

以上、松村の人物像を確認した。特定の人を信奉しやすく、その人のためなら、法を曲げてでも全力を尽くして奉仕するところがあった。反面、短気で、軽蔑的な態度を取る場合もあった。相手次第で、複雑な表情や態度をみせる人物だったようである。

## おわりに——最晩年の様子ともに

先述のとおり、松村は1940年に北京から帰国した。その後、どのような過ごしていたのだろうか。渡辺三男「明末の日本紹介書『日本一鑑』について」<sup>(59)</sup>に、帰国後の松村と書簡を往復した、との記述がある。

### f、文殿閣影印本（一帙五冊）

これは民國二十八年九月（昭和十四年）北京隆福寺街の古書肆文殿閣が影印刊行したものである。當時同書肆には、篤学の老北京として、心ある在燕好學の同胞の間に信望のあつた、大分縣の人松村太郎氏が在つて、國學文庫等の刊行事業を督してをり、この影印本の刊行も、同氏の企畫するところであつた。昭和十八年の六月のころ、已に郷里大分縣國東町に歸國して老を養つてゐた松村氏との間に、この書刊行の事情について改めて書信を往復したことがあるが

……「京都帝大所藏鈔本の寫眞によりて、更に北京の某支那人を煩はして鈔寫せしめ、影印したのであります……」といふことであつた。

『日本一鑑』三部十六卷は、鄭舜功が、戦国時代の日本で自ら収集した情報を記録する書<sup>(60)</sup>で、文殿閣影印本は、底本の一つとされている。渡辺三男（1908～2000）は、1939～41年、外務省東方文化事業部からの派遣で北京に留学した国語学者である。留学中、中国各地を巡り「図書約四千五百冊を採購して帰国」した<sup>(61)</sup>という。渡辺は、このときに書籍購入を通して松村と知り合ったと思われる。

渡辺は松村について、文殿閣の一員で、「篤学の老北京として、心ある在燕好學の同胞の間に信望のあつた」と評した。さらに、1943年6月当時、松村は「郷里大分縣國東町に歸國して老を養つてゐた」とも記す。この場所は、1937年10月に松村が岩波茂雄（1881～1946）宛てに手紙を出した際の発信地でもある<sup>(62)</sup>。これらのことから、大分県国東町（現在の国東市）が松村の故郷であり、終の棲家であつたのだろう<sup>(63)</sup>。

以上、松村太郎の足跡と人物像をみてきた。松村は、中華民国建国前後に北京へ渡り、生涯の大半を彼の地で過ごした。若い頃は報道関係者として、時には陸軍諜報機関の一員として活動した。近現代史への関心から、和田清と意気投合し、東洋文庫の書物収集に関わつた。さらに、錢稻孫の考え方に共鳴して日本語図書室泉寿東文書庫の開設に参画し、機関誌刊行や書籍取次を担当した。しかし、満洲事變の勃発により図書室は閉鎖となり、個人で書籍取次販売を行つた。1935年末頃、書籍の取次をやめたとみられ、その後は文殿閣で、稀覯書の翻字・影印本の出版に携わつた。1940年に故郷の大分県国東町へ戻り、終戦の前年にこの世を去つた。

松村の人柄については、好評不評さまざまであつた。ただ、日本と中国が相互理解を深めて良好な関係を築くことを望む気持ちは、生涯変わらなかつたのではないだろうか。松村太郎の遺した資料が、今後も学術研究に活用されることを期待したい。

本稿執筆にあたり、東洋文庫の斯波義信文庫長と図書部篠崎陽子氏に

格別のご配慮をいただいた。とりわけ、篠崎陽子氏には、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う規制のもと、東洋文庫所蔵資料の調査に多大なるご協力を受けた。また、関連資料の閲覧・複写にあたっては、東洋文庫および関西大学図書館にお世話になった。ここに記して厚く御礼申し上げます。

#### 註

- (1) 引用資料等において「支那」と表記するものは、原文のまま用いる。
- (2) 「先学を語る——和田清博士」(『東方学』第56輯、東方学会、1987年7月) 参照。
- (3) 上海で出版された島津長次郎『北京在留邦人人名録』(金風社、1920年) は、「国民新聞社通信員 松村太郎(新潟縣) 崇文門姚治國胡同」と記す(10頁)。
- (4) 北京在住の陸軍少将・坂西利八郎(1871～1950)の館。坂西は長期にわたり北京に駐在(1902～08年および1911～27年)し、民国政権顧問などをつとめた。
- (5) 和田清『東亜史研究(満洲篇)』(東洋文庫論叢第37、1955年)、668頁。
- (6) 満洲語文献収集については、松村潤氏の著作などにも同様の言及がある。
- (7) 宇野哲人『支那文明記』、108頁。
- (8) 丸山昏迷『北京』、370頁。
- (9) 『東洋文庫十五年史』、551頁。
- (10) 前掲『北京』、374頁。1925年元旦発行の『北京週報』(藤原鎌兄主編、極東新信社) 所載「北京居留日本人指名電話住所表(大正13年12月25日現在)」にも松村太郎の名がある。住所は「棲鳳樓小三篠路北七」である(『北京』所載住所に同じ)。『北京』によれば、『新支那』を一緒に創設した安藤万吉は新支那社主、鷺澤與四二は華北正報社主兼東京時事新聞主任、井上一葉は読売新聞主任である。
- (11) 徳富猪一郎『支那漫遊記』、178～179頁。
- (12) 「松村氏轉呈徐氏祝辭」(『順天時報』、順天時報社、1918年9月12日2面)。本文は「国民新聞駐京特派員松村太郎氏日急遽該社社長徳富氏致徐世昌當選大總統之祝電報於日昨午後五時詣東四五條胡同徐氏本宅轉遺祝

辞云」。

- (13) 外務省外交史料館史料、分類番号=4、3、2、2-116「不逞団関係雑件 朝鮮人の部 在支那各地一（一卷）」所収。当該文書第1頁の枠上に「写」と朱書きあり。また、文末に「報告先 天津領事館警察署長」と記す。
- (14) 当該史料によれば、李光洙は、翌1919年1月10日まで北京に滞在し、順天時報社長渡邊哲信や今関天彭（本名寿磨、1882～1970）とも往来があったという。
- (15) 徳富猪一郎『支那漫遊記』「例言」参照。
- (16) 中国地学会は、1909年に天津で張相文（1867～1933）を中心に結成され、辛亥革命ののち、北京に本部を移した。
- (17) 『地学雑誌』第7年第11期第77号（中国地学会、1918年11月）の「本會紀事 會員題名」および郝祥満「日本近代绘制地図・对清末地图学的影响」（『社会科学战线』2017年第1期・区域历史与文化、吉林人民出版社）参照。
- (18) 一部に欠号がある。また、所蔵経緯は未詳である。
- (19) 『日本外交文書』大正九年第二冊上巻（外務省、1970年）、552頁。「秘参第160号 北京駐屯歩兵隊収容支那人ノ行動ニ関スル件報告」の「三、面会人ノ景況」参照。
- (20) 神戸大学附属図書館「戦前期新聞経済記事文庫データベース」（URL：<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>）により抽出した。最終確認日=2020年2月28日。
- (21) 日本の二十一ヶ条要求、旅順・大連の租借権放棄の拒絶などによる。
- (22) 『徳富蘇峰関係文書』第三巻（山川出版社、1987年）、490頁。
- (23) 1929年1月17日の『国民新聞』に徳富蘇峰の「引退声明書」が掲載された。
- (24) 『東洋文庫十五年史』の該当頁を下に示す（同一頁に複数記載がある場合、括弧内に掲載数を記す）。452、453（2）、525、532（2）、541（5）、550（2）、551（10）、554（2）、559（2）、561、562、563、564（2）、573（3）、589（2）、610。以上38箇所。
- (25) 字紙箋とは、紙くずかごの意である。拙文「銭稻孫の私設日本語図書室『泉寿東文書庫』」（『中国文学論集』第46号、九州大学中国文学会、2017

- 年) 参照。
- (26) 鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男——万葉集を訳した銭稲孫の生涯』(東方書店、2014年) 参照。
  - (27) 前掲拙文「銭稲孫の私設日本語図書『泉寿東文書庫』」所載の岩波茂雄宛松村太郎書簡参照。
  - (28) 『書香』第11号(大連満鉄図書館、1930年2月)、3頁参照。
  - (29) 黄子明は、さきの志賀直哉の旅行日記にも登場する。慶應義塾出身で、当時南満洲鉄道の情報課嘱託であった。『字紙篋』創刊号巻頭文は黄子明による。中塚亮「韓世昌による崑曲来日公演とその背景について——満鉄の弘報活動との関係から」(『名古屋大学附属図書館研究年報』第6号、2007年) 参照。
  - (30) 宛名の筆跡は、岩波書店、関西大学内藤文庫が所蔵する松村太郎発信の書簡(後述)と酷似している。
  - (31) 『志賀直哉全集』第11巻(岩波書店、1973年) 所収。
  - (32) 里見淳『満支一見』(春陽堂、1932年)。
  - (33) 1月20日の項。里見淳は、発熱のため銭稲孫の招宴を欠席し、志賀直哉のみが出席した。
  - (34) 『字紙篋』第2巻第3号(1931年3月)、5頁。
  - (35) 前掲拙文「銭稲孫の私設日本語図書『泉寿東文書庫』」所載の岩波茂雄宛松村太郎書簡参照。
  - (36) 東洋文庫第66回理事会(1935年12月16日)の議事録(詳細は後述)によれば、正式に取次の委託を受けたのは、1929年1月である。
  - (37) 関西大学図書館「文庫・特殊コレクション」ウェブサイト所載「17: 湖南宛書簡」(2013年。URL: [https://opac.lib.kansai.ac.jp/index.php?page\\_id=17216](https://opac.lib.kansai.ac.jp/index.php?page_id=17216)) 参照、最終確認日=2020年7月14日。関西大学図書館内藤文庫の資料Noは、1338、1343、1630、2061、2072、2996、3058、3059、3062～3065、3121(破片、二回分)。このうち、3058と3121の一片、また2996と3065は、それぞれ二点で一組である。発信者名は、泉寿東文書蔵、字紙篋社、松村太郎と相違がある。相違の理由は、時期によって松村太郎の立場が変化したことによるものと思われる。
  - (38) 松村太郎の署名はないが、他の署名付き書簡と筆跡が同一であることか

ら、松村太郎の筆と判断した。なお、本書簡には、手紙本文のほかに書籍売買に係る「計算書」が付されている。

- (39) 内藤湖南が逝去したのは1934年6月26日。
- (40) 『書誌学』第2巻第5号（書誌学社、1934年5月）60～61頁。
- (41) 原題『History of the Mongols : from the 9th to the 19th century』、著者はHenry H. Howorthである。
- (42) 原題『Die Sprache und Schrift der Jucen』、CiNiiは『女真語言文字考』と記す。著者はGrube Wilhelmである。
- (43) 原題『The journey of William of Rubruck to the eastern parts of the world, 1253-55 ; translated from the Latin, and edited, with an introductory notice by William Woodville Rockhill = 洛克希爾譯註』、ルブルクの旅行記をロクヒルが英訳したもの。
- (44) 正式な書名は『西洋人論中国書目』、原題『Bibliotheca Sinica : dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs a l'Empire chinois』、著者はHenri Cordier。
- (45) 雷夢水『書林瑣記』（人民日報出版社、1988年）、61頁。原文は以下のとおり「一四七号 文殿閣 王殿馨字渤馥，河北東鹿县人……約在1931年左右，有日人松村太郎者，來京收書，先與松筠閣交往最篤，后至隆福寺街文殿閣購書，店伙呂清榮招待殷勤，因而購書大部分來自其店。此後，該店生意興隆。松村亦常年居其庫房，嘗選有關邊疆之珍籍，編印《國學文庫》四十一種，計四十九冊。及《西洋人論中國書目》五冊」。なお、CiNiiで確認したところ、日本国内に有する國學文庫は、49編49冊で、雷夢水の記事とは齟齬がある。
- (46) 寸法＝縦18.8×横13.2センチメートル。
- (47) 東洋文庫第66回理事会（1935年12月16日）議事録によれば、松村は1929年1月より北京での漢籍購入を代行していたが、本人都合により1935年末で謝絶するとの連絡があり、理事会で謝金と礼状の贈呈が承認された（翌年理事会で手続き完了報告）。
- (48) 前掲『東亞史研究（滿洲篇）』、668頁。同様の回想が前掲「先学を語る——和田清博士」にもある。子息の和田久徳氏は、松村太郎について、和田が「北京から歸ってきた後でも、いつも安い本を送ってくれる」と

述べていたと回想する。

- (49) 鴻山俊雄「青春回想——北京遊学・青島滞在の頃」（『日中交流七十年——その道一筋の回顧』、華僑問題研究所、1988年）。98頁に記念写真が掲載されているが、松村太郎の姿はない。
- (50) 九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記——一九三〇年代北京の学術交流』（中国書店、2019年）。原本は、福岡県の大野城心のふるさと館所蔵。
- (51) 引用部分の『目加田誠「北平日記——一九三〇年代北京の学術交流』掲載頁は、記載順に43頁、45頁、162頁、197頁、217頁。
- (52) 『竹内好全集』第15巻（筑摩書房、1981年）、296頁。
- (53) 森鹿三（1906～80）、今西春秋（1907～79）は、ともに京都帝国大学東洋史学科の卒業生で、北京に留学していた。
- (54) 葉祖孚「古老的文化街——『琉璃廠小志』読後」（『読書』1985年05期、生活・読書・新知・三聯書店）、140～145頁。
- (55) 原文は以下のとおり。「一九三〇年左右、日本人松村太郎到松筠阁古书店买书，和学徒发生口角，他猖狂地要书店辞退学徒，并以不到书店买书为要挟。松筠阁主人刘际唐，是收藏期刊杂志的专家，他大义凛然地拒绝了日本人的无理要求，表示宁可不做生意，也要保护学徒，一时传为美谈。」
- (56) 孫殿起「琉璃廠書肆三記」（前掲『琉璃廠小志』）、153頁参照。
- (57) 徐雁『中国旧書業百年』（科学出版社、2005年）の「六 燕京旧書業人物志林」 「6 劉際唐、劉殿文父子」注①に「《文汇报读书周报》1994年10月1日号。据魏先生文中说，松村太郎时为会文书局《顺天时报》的编辑，与刘际唐交往数年，“为松筠阁介绍不少生意，书店赚了不少日本人的钱”，后因事断交，不再来往，松村太郎“就给隆福寺文殿阁介绍生意去了”とある（169頁）。
- (58) 今村与志雄「橋川時雄年譜」（『橋川時雄の詩文と追憶』、汲古書院、2006年）には当時の人名録等より順天時報構成員名が複数引かれているが、「松村太郎」の名はない。非常勤だった可能性もあり、国民新聞、順天時報二誌の在籍時期については確定できていない（待考）。
- (59) 『駒澤大学研究紀要』通巻13号（駒澤大学、1955年3月）。
- (60) 鄭舜功は、弘治2（1556）年に倭寇の禁圧と日本の実情調査のために来



日した。一時、豊後の大友氏に幽閉された。後年、日本での経験や実情、倭寇対策などをまとめ『日本一鑑』を著した。本書は、日本語の語彙4,300の音訳も付す。片山晴賢「『日本一鑑』の基礎的研究 其之一」（『駒澤短期大学研究紀要』第24号、駒澤短期大学、1996年3月）ほか参照。

- (61) 「渡辺三男年譜略——子どもらのために——」（渡辺三男博士古稀記念論文集刊行会、『日中語文交渉史論叢』桜楓社、1979年）参照。
- (62) 岩波書店蔵。前掲拙文「錢稻孫の私設日本語図書室『泉寿東文書庫』」所載の岩波茂雄宛松村太郎書簡参照。
- (63) 2017年8月14日、岩波茂雄宛書簡の住所、大分県国東市国東町田深地区にて、現地調査をおこなったが消息不明であった。

